議　事　録

会議名	**令和４年度　第２回三鷹市認知症地域支援ネットワーク会議議事録**
日　時	令和４年 10 月 11 日（火）　午後７時 00 分～午後８時 30 分
会　場	三鷹市教育センター　二中研
出席委員	【委員】　神﨑恒一、菊池健、木之下徹、名古屋恵美子、斉藤貴彦、上遠野範子、道三啓吾、服部将志、望月謙治、吉本朋子 ＜定員数 11 人中 10 人出席：有効＞
事務局	健康福祉部調整担当部長兼旧どんぐり山施設整備担当部長、高齢者支援課長、他事務局２人
会議の公開・非公開	公開
傍聴人数	0 人

１　開会

【健康福祉部調整担当部長兼旧どんぐり山施設整備担当部長馬男木より挨拶】

９月の市議会において、具体的な認知症施策についての質問があった。議員を通してではあるが、市民が認知症への関心や不安を持っているという事を改めて実感した。

本市では来年度に第９期介護保険事業計画を策定する予定である。認知症は重要な分野のひとつであるので、本会議に参加していただいている専門家の皆様からご意見をいただき、認知症の方も地域で安心して生活できる仕組みについて考えていきたい。

【事務局からのお知らせ】

・議事録の作成と公開について
・本日の配付資料の確認

２　議題

(1)　「認知症サポーター活動促進事業（チームオレンジ）について」

前回の会議では認知症当事者や物忘れが気になりだした方がボランティアに行く際に声掛けや付き添いをしてほしいというニーズを包括に相談しながらマッチングしていく仕組み作りを議論してきた。その後検討を重ねたが、ボランティアセンターのボランティアのマッチング機能を活用するという構想は現時点では難しいという結論に至った。

その一方で SOMPO ケアやシルバー人材センターと包括を交えながら意見交換を行った。シルバー人材センターとはチームオレンジとしての協力は難しいが、包括との連携を深めていくという点では意見が合致し前進があった（例えば包括が会員向けに認サポや介護予防の講話を行い、会員同士の支え合いが大切であることを伝えていく等）。一方の SOMPO ケアからは市内のラヴィーレ武蔵境という有料老人ホームの敷地内のテラスを畑として活用できるのではという意見を頂くことが出来た。詳細は未定だが、この畑をコミュニティ・ガーデンと名付け、説明会を開催し参加者を募っていきたいと考えている。

チームオレンジに参加してもらう認知症サポーターは認知症サポーターのフォローアップ講座を受講済みであることが条件となっている。今年度の認知症サポーターフォローアップ講座は 10 月 8 日（土）に開催し「認知症になってもこのまちで暮らし続けたい」～私たちができることを一緒に考えましょう～をテーマにトークセッション、グループワーク、チームオレンジの取組紹介を行った。32 名の方にご参加いただき、受講後のアンケートによると、今後のチームオレンジの活動に 23 名の方が興味を示していた。

ア 質疑応答

委員	コミュニティ・ガーデンの開園だけでは活動の場としては絶対数が足りない。
事務局	色々な側面で検討し様々なものを本事業と絡められるようにしていきたい。
委員	前回の会議で認知症「サポーター」ではなく「パートナー」という表現の方が良いのではないかというがあった。このような意見は取り入れていかないといけないと思う。
委員	コミュニティ・ガーデンがどういった物になるのか出来上がったイメージがあると参加者もわかりやすいと思うが、講師の様な方はいるのか。
事務局	認まち実行委員の中に農業体験者の方がいらっしゃるので、その方の力も借りながら作り上げていきたいと考えている。
委員	今後は農作物を作り販売するという様な展開になるのか。
委員	参加者との話し合いによるものであり、取り組みの展開次第だと考えている。
委員	参加者に金銭的な収入があるとモチベーションが上がるかもしれない。
委員	認サポのフォローアップに参加した方の年代や性別についてはどうか。
事務局	一番多い世代は 70 代だが、50 代や 60 代の方も、見受けられた。男女比では女性の方が多かった。
委員	このチラシは包括にも配るということだが、どういった機会に配るのか。
委員	地域のサロン活動、講座、セミナー、関係団体の連絡会などで配布はしたい。また、事務局体制を強固にしていくための知恵をネットワーク会議で出し合いたい。
委員	事業全体の事務局機能がしっかりと携えていないと、活動場所との折衝や参加者の管理は難しいのではないか。
事務局	順次検討をしていく。

（２）「認知症初期集中支援推進事業について」

平成30年度の開始から５年を経過した本事業の現状説明を吉本委員及び望月謙治委員から行う。令和３年度の新規相談件数が２件と新型コロナウィルスの影響が見られる。その一方で、年３回の関係者間の打ち合わせ会を行い、チーム員と包括で意見交換をすることが出来た。また、杏林大学病院主催の北多摩南部地域認知症連携会議へのチーム員の参加など継続して行うこともできている。令和３年度に終了した９例について報告する。この事業は初期の認知症の人を把握できる仕組みがないためこのような人たちの話を聞くことから始めたものである。認知症サポーター活動促進事業のヒントに繋がっている部分もあり、意味がある事業である。

ア 委員からの意見

委員	この事業の特徴的なことは、本人が受診し、さらに思いを話すことで次のステップに進んでいる成果があるということである。さらに地域に出向いて行くような形が増えるとありがたい。
委員	チームオレンジとの連携は良いことだと思う。この事業が受診の手前で地域に展開され、一般化した身近な存在になってくれるとありがたい。
委員	のぞみメモリークリニックの様なクリニックが市内に数か所できれば、身近な存在になれるかもしれない。
委員	北多摩南部地域認知症連携会議で認知症検診について話をしたが、調布市や小金井市が認知症検診を始めた。診断後どう支援するのかという話が必ずついてくるので、やるのであれば、しっかりと考えておく必要が

	ある。

(3)「認知症にやさしいまち三鷹イベント等の取り組みについて」

今年度は認知症サポーター養成講座を各 7 包括で主催し、三鷹の全エリアで展開をしている。40～50 代の比較的以前より若い世代の参加が見られている。

また認まちのイベントについてもすでに多数の申し込みをいただいている。また改定された認知症ガイドブックも活用をお願いしたい。来年度はチームオレンジの情報も掲載する予定である。

ア 委員からの意見及び質疑応答

委員	認知症ガイドブックの存在は助かる。クリニックに置いておくとすぐにはけてしまう。いかにこういったものにニーズがあるかがわかる。
委員	「三鷹かよおっと」には様々なサービスの情報が網羅されているが、情報の更新などはどの様に行っているのか。
事務局	生活支援コーディネーターが地域活動を集約し、毎年情報を整理している。
委員	簡易版を全戸配布すれば、更なる周知が図れるがどうだろうか。
事務局	認知症ガイドブックは本当に必要な方にしっかり行き渡る様な、説明が出来る様な物として出来ている。必要な部数は発行しているが、本当の意味で市民に行き渡るというのは大切な事。予算の関係もあるが、もう少し周知しても良いかもしれない。
委員	包括では相談の中で配るタイミングの難しさもある。
事務局	行方不明高齢者探索ネットワークは掲載しないのか。 警察と連携している事業なので掲載の仕方は検討しないといけないが、検討はしていきたい。

3　その他

(1) 議題提案について

ネットワーク会議がこの先どの様に進んでいくのかにも関わっていくが三鷹の中で何かこんなことができないかという意見出しを事前にお願いしていた。

① アクリルたわし作り

編み物のレベルで作成可能なアクリルたわしを作り、東南アジアに送るボランティア活動が横浜にて行われている。見た目もカラフルで、楽しく参加できるのではないか。

② 福祉Ｌａｂｏについて

旧どんぐり山の「福祉Ｌａｂｏ　どんぐり山」での仕事（食堂、清掃、事務員）など仕事がしたくても場所がない方が、安心して働く支援を受けながら活躍できる場所。

【意見】

・福祉Ｌａｂｏは令和５年 12 月にオープンの予定。事業の中身は固まっていないが、在宅医療の介護に対しての人材育成と、生活リハビリセンターという７床の居室でいかに在宅の生活ができるかという事を家族と一緒に１ヶ月以内で宿泊し訓練するというイメージを持っている。担当者レベルでは認知症当事者の方が宿泊した際には一緒に働いてもらう事も検討している。

・②については実現可能性が高いと思うが、前回の会議では認知症当事者かどうか、という線引きは良くないのでは、という意見もあった。

・市の人権基本条例に認知症を個別にうたえないか、ということについて検討が行われている。

③ 認知症有無に関わらず、高齢者が今までの趣味を生かせる場の形成
【意見】
・三鷹かよおっとには体操など地域の集まりが掲載されている。市民活動まですべてを網羅できる程には掲載が出来ていない。
・認サポフォローアップ講座の参加者に趣味や特技を聞き取り、同じような趣味を持っている人とパートナーとして認知症当事者と一緒に楽しんでいけると良い。
④ オレンジ人材センターを立ち上げ、認知症当事者の方の「やりたい事」「できる事」を出し合って、実際に収入を得られるようサポートする。
【意見】
・当時者のニーズを把握するため、当人たちから話を聞くことから始めることが大切だと思う。
⑤ 認知症当事者へのニーズの聞き取り
【意見】
・三鷹おれんじドアなど、認知症当事者が集まる会などでお話を伺うことは出来るかもしれない。そういった場なら周りに仲間がいることで話しやすいかもしれない。
・三鷹紫水園でも数カ月前から認知症当事者の方の声から施設内のボランティアをしていただく活動を始めているようだ。
・障がい者の方の仕事の場として運営されている「むうぷ」にも若年性認知症の方が参加している。利用の形態によって収入は異なるが、障がい部門との連携も視野に入れていくべきだろう。
⑥ その他
・世界の潮流としては、認知症当事者を障がい者の枠に当てはめ、合理的配慮が権利として付与されるようだ。ただ、活動をしてもらう上で、認知症当事者かそうでないか、で線引きをするべきではない。医療福祉系の業界は盛り上がっているけど、経団連は一切関心がない。働くという事は最低賃金で働くことだという事を我々も意識として持っておく必要がある。
・目指すイメージは、まだまだ働きたい人達が集まって、助け合いながら、という方向に向かっていけたら良いのだと思う。

議事録署名委員

令和５年１月 20 日　杏林大学病院医学部高齢医学　神﨑 恒一

令和５年１月 20 日　三鷹市西部地域包括支援センター　服部将志